

もとむらまさふみ  
本村昌文

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 161 号
学位授与年月日	平成15年 7月24日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期 3 年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	江戸時代前期における仏教批判 —宋明学の受容と変容との関わりをめぐって—
論文審査委員	(主査) 教授 佐藤弘夫 教授 吉田 忠 教授 中嶋隆藏

## 論文内容の要旨

本論文は江戸時代前期—1600年頃～1660年代—における儒教と仏教の論争、とくに儒者の仏教批判に焦点をあてて、儒仏論争を新たな角度から捉え直すことを試みるとともに、当該時期における宋明学の受容と変容の様相を明らかにすることを目的としている。

江戸時代になり、儒教、とりわけ朱子学が新しい学問体系として、本格的に受容されるに至り、仏教を排斥する言説、いわゆる排仏論が活性化した。江戸時代前期の儒者は多かれ少なかれ仏教を批判しており、その例は枚挙に暇がない。そして儒者たちが仏教を批判するやいなや、仏教側から反論が起り、以後儒教と仏教の論争は江戸時代を通じて繰り広げられていった。儒者からの本格的な仏教批判が思想界に投げられることにより、それ以前とは異なる思想的状況が現出することになったのである。とりわけ江戸時代前期は儒教と仏教との間で激しく論争が展開した時期である。そうであるならば、こうした儒仏論争を分析することは、江戸時代前期における思想史の重要な一側面を照射することになるであろう。

本論文の構成は以下の通りである。

序章では、先行研究の整理とその問題点を指摘し、本論文の課題と視点について述べた。

第一章では、中江藤樹(慶長13年・1608～慶安元年・1648)の仏教批判を検討し、およそ寛永年間までの儒者の仏教批判の論理を明らかにした。

第二章では、林羅山(天正11年・1583～明暦3年・1657)の仏教批判の推移を明らかにし、羅山の死生観の構造とその特色を検討した。

第三章では、羅山と同じく藤原惺窩に師事した松永尺五(文禄元年・1592～明暦3年・1657)の『彝倫抄』(寛永17年・1640)にみられる儒仏論と死生観に着目し、寛永末年頃に朱子学の死生観が注目され

ていく契機とその受容の様相を検討した。

第四章では、仮名草子を素材として、17世紀初頭から17世紀中葉に至る仏教批判の推移とそこに示された死生観の構造とその特色を検討した。

第五章では、向井元升（慶長14年・1609～延宝5年・1677）の仏教批判および死生観の構造とその特色を検討した。

終章では、本論文において明らかにしたことをまとめ、展望を述べた。

以下、本論文の構成にしたがって、内容の要約を示す。

## 序章 研究史の回顧と問題設定

序章では、江戸時代における儒者の仏教批判に関する先行研究を整理したうえで、その問題点を指摘し、それを解明するための視点について述べた。

まず研究史を1970年頃を境に二つに分けて論じた。1970年頃までは、江戸時代における儒者の仏教批判に関する研究は、当該時期の仏教思想の特色を照射する目的をもってなされてきた。そこでは、儒教＝体制教学＝思想界の主役、仏教＝体制に組み込まれて思想的魅力を喪失した教説＝思想界の脇役という構図を前提とし、江戸時代における仏教思想を墮落したものと捉える見解と仏教批判に対する仏教側の対応（護法論）に江戸時代の仏教思想の特色を認める見解とがあることを述べた。

1970年代後半以降、中国の朱子学と江戸期の朱子学の差異が検討されるようになり、東アジア世界のなかで江戸期の儒教思想を分析する方法が主流を占めるようになった。その結果、儒教＝体制教学＝思想界の主役、仏教＝思想界の脇役という構図自体が見直され、朱子学は近世社会において思想的社会的影響力は小さく、仏教が広く社会に浸透した思想であるという構図が定着していき、儒仏論争もその枠組みのもとで再検討されるようになった。そこでは、儒者の仏教批判を通して、江戸時代における儒教思想の特色を明らかにする研究とともに、江戸時代の仏教思想の特色を捉え直す動きが生じてきたことを指摘した。1970年代以降、朱子学は近世社会において思想的・社会的影響力は小さく、仏教が広く社会に浸透した思想であるという構図のもと、様々な角度から儒仏論争が検討されてきた結果、現在では次の2点が通説となっていることを述べた。

1点めは、およそ徂徠学の登場する18世紀初頭において、江戸期の儒仏論争は2分されるということ、2点めは江戸期の儒仏論争は中国におけるその受け売りが多く、双方にさしたる思想的影響を与えることはなかったということである。

かかる通説に問題点として以下の2点を指摘した。まず1点めとして、17世紀中葉に至り、儒者が仏教の死生観、とくに人間の死に関する見解を批判するようになることに着目し、その変化の様相を明らかにする必要性を述べた。本論文における考察の対象時期を1600年頃から1660年代と限定したのは、以上の理由によるものである。2点めとして、17世紀中葉にいたり死生観が問題となるならば、儒者の死生観の構造を明らかにし、それを当時仏教批判の論理を提供していた朱子学と比較検討していくことにより、「受け売り」とされてきた江戸時代における儒者の仏教批判の特色を明らかにできることを述べた。具体的には、朱子学においては、「気の生生の原理」—万物は気の働きによって生じ、一度造化作用に与った気はふたたび造化作用に参与することはないという論理—をもとに死生観を構築し仏教を批判していることに注目し、かかる論理が江戸前期の儒者たちにどのように受けとめられたのかという点を明らかにすることである。またかかる視点からの考察は、江戸時代における儒者が「気」の思想をいかに受けとめたのかという問題を解明することにつながっていくことを指摘した。

以上の2点に加え、17世紀中葉において儒者の仏教批判が変化していくとするならば、その契機と

なったものを明らかにする必要があることを述べた。

最後に本論文で扱う対象の選択として、当時の仏教者の史料をもとにして、中江藤樹、林羅山、『清水物語』（寛永15年・1638刊行）を含めた仮名草子を扱うこと、加えて林羅山と同じく藤原惺窩に師事した松永尺五、1650年代から1660年代にかけて仏教批判を展開した向井元升を取りあげることが述べた。

## 第1章 中江藤樹の仏教批判と『孝経』

本章では、中江藤樹（慶長13年・1608～慶安元年・1648）の仏教批判を死生観に焦点をあてて検討した。先行研究では、藤樹の仏教批判が人間の「心」の工夫論を重視する立場からなされているという指摘があり、それを踏まえつつ、藤樹の仏教批判の論理を提供した書物の確定と藤樹の仏教批判の位置付けを行うことを目的とした。

藤樹は現世における「心」の工夫論という次元において人間の死の問題を捉え、その立場から仏教の死生観を批判した。藤樹は太虚一天地一父母一自己という生成のプロセスとその自覚を『孝経』という書に読みこむことにより仏教を批判したことを明らかにした。

次に藤樹の仏教批判の論理が明代末期・崇禎6年（1633）に江元祚が編集した『孝経大全』という書物に収録された虞淳熙の『孝経』解釈にあることを指摘した。さらに藤樹は虞淳熙の見解をもとにしつつも、虞淳熙の説く死生観については引用することがなかったことから、藤樹は人間の死について関心を向けることはなく、彼の仏教批判では死の問題は棚上げされていたことを述べた。

最後に藤樹の「心」の工夫論を重視する立場は、婦女子教訓書として執筆した『鑑草』という書にも通底するものであることを述べ、17世紀中葉以降の婦女子教訓書における仏教批判の様相と対比させることにより、仏教批判の展開を明らかにした。藤樹に師事した熊沢蕃山（元和5年・1619～元禄5年・1691）にまず着目した。蕃山は藤樹とは異なり、人間の死とはいかなるものなのかという点を明示して仏教的死生観を批判したことを明らかにし、蕃山には人間の死について自らの言葉で語り、仏教と自身の教説を差異化するという意識が生じてきていることを指摘した。さらにこうした現象が蕃山だけにみられるのではなく、中村惕斎（寛永6年・1629～元禄15年・1702）の婦女子教訓書にもみられることを述べた。以上のことをもとにして、17世紀中葉以降に執筆・刊行された婦女子教訓書では、人間の生と死を儒教の論理に基づいて明示し、仏教の死生観自体の誤謬を暴露する見解が示されるようになったことを指摘し、17世紀中葉に至り、儒者の仏教批判が変化していく様相を明らかにした。

## 第2章 林羅山の仏教批判と死生観

本章では、およそ17世紀前半に江戸幕府に仕えた林羅山（天正11年・1583～明暦3年・1657）の仏教批判を死生観の問題に焦点をあてて検討した。まずはじめに、羅山の仏教批判は17世紀初頭から死去するまでおよそ半世紀にわたってなされたものであるにもかかわらず、先行研究では彼の仏教批判の時期的変遷に注意を向けてこなかったことを指摘し、その点を解明するためには、死生観に着目して羅山の仏教批判を跡づけていくことが有効であることを述べた。

次に慶長4年（1604）から元和年間（1615～1623）における羅山の仏教批判を検討し、羅山が儒教を〈人倫の教説〉として捉え、現世における有効性を強調して、仏教の輪廻再生説を批判したことを明らかにした。そしてこのような批判形式が、人間の死について言及しないという点において、さきに検討した中江藤樹と同様の発想を有していることを述べた。しかし、寛永末年～正保年間（およそ1637頃から1647）に執筆された『本朝神社考』では、朱子学の死生観をもとにしつつ人間の生死を論理的に提示して、儒教を〈生死の教説〉として通用させ、仏教的死生観を批判するようになったことを指摘し、羅

山の仏教批判が変化していくことを明らかにした。

さらに羅山の死生観の構造とその特色を朱子学の死生観と比較検討して明らかにした。羅山は朱熹の「気の生生の原理」に依拠しているようにみえつつ、死後観だけは朱子学において異端的要素を包含するとして斥けられた張載（1020～1077）と近似する理論をもとにして、人間は死後「大虚」の働きによって、「高天原」（＝大虚）に存する万物を生成する根源神と一体化するというものであったことを指摘し、羅山の仏教批判には朱子学の受け売りとしては捉えきれない側面があることを述べた。

### 第3章 朱子学の死生観の登場—松永尺五の思想をめぐって

本章では、羅山と同じく藤原惺窩に師事した松永尺五（文禄元年・1592～明暦3年・1657）の『彝倫抄』（寛永17年・1640）を検討することによって、朱子学の死生観が注目される要因の一端と朱子学で説かれる死生観の受容の様相を明らかにすることを目的とした。尺五は羅山と異なり仏教に寛容な態度を示していたが、寛永14年（1637）に勃発した島原の乱をきっかけとして民衆教化のためには儒教の教説が必要であるという認識をもった。彼は民がキリスト教に感化されないようにするためには、人間の生死の論理を明確に示すことが必要であると考えていたこと、そしてその教説として注目したのが朱子学の死生観であったことを指摘し、朱子学の死生観が江戸前期の儒者に取りこまれていく一つの契機を明らかにした。次に尺五の死生観は朱熹の主張を忠実に引用しているように見えながら、朱熹の主張の核心—「気の生生の原理」—を捨象し、個々人の魂魄が死後天地に常在することを主張するものであったことを指摘した。尺五は仏教の現世における人間の生き方を説く側面のみを儒教と一致させ、人間の生と死に関しては朱子学の理論を取り入れ、仏教と朱子学が一致することを志向していないということを述べた。かかる主張は、ほぼ同時代の中江藤樹と対照的なものであり、仏教とは異なる論理をもって人間の生と死を説きはじめる転換点が寛永17年頃にあったということを明らかにした。

### 第4章 仮名草子における仏教批判の変容

本章では、『清水物語』（寛永15年・1638刊行）と当時の医者として著名な中山三柳（慶長19年・1614～貞享元年・1684）が朱子学を「童子」に教諭する目的をもって執筆した『飛鳥川』（慶安5年・1652刊行）を中心に、仮名草子にみられる仏教批判と死生観を検討した。前章において、寛永17年（1640）頃が朱子学の死生観に着目されはじめる重要な転換点と指摘したことをふまえて、寛永17年を分岐点として仮名草子ではいかなる仏教批判の変化が生じたのかということを明らかにすることを目的とした。

まず『清水物語』とその反駁書である『祇園物語』を素材として、およそ寛永年間における儒仏論争の様相を明らかにした。そこでは、儒教側は自説の有する現世における有効性を武器に仏教の死生観を批判し、人間の死について儒教固有の論理を提示することはなく、仏教側は自説が現世において有効であるだけでなく、人間の死後についても言及していることを武器に儒教側の主張に反駁したことを述べた。とくにこの時期においては、儒教側は人間の死について仏教とは異なる論理を提示せず、仏教側には朱子学の死生観を批判する意識が生じていないことを指摘した。さらにこうした儒教側の仏教批判の形式が、中江藤樹や慶長・元和年間における林羅山の仏教批判と共通する発想を有していることを指摘した。

かかる批判は、中山三柳が『飛鳥川』を執筆し、その著が刊行された17世紀中葉に至り、朱子学の理論を受容しつつ、人間の生と死の論理を明示して仏教批判を展開するようになるというように変化することを述べた。また17世紀中葉における仏教側の儒教批判を取りあげ、この時期に至り朱子学の死生観を批判するようになることを述べ、寛永17年を境に、儒教側は朱子学の理論をもとに仏教的死生観とは

異なる死生観、とくに人間の死について語りはじめるようになること、こうした儒教側の仏教批判の変容に対応して、仏教側は中国の護法書をもとに朱子学の死生観を批判の対象とするようになったことを明らかにした。

次に、中山三柳の『飛鳥川』に示された死生観の構造と特色を検討した。三柳が提示した死生観を朱子学と比較検討することによって、彼が朱子学の理論をベースにしつつも、朱熹が自らの学説の理論的基盤としていた「気の生生の原理」を捨象し、死後の魂魄の永続を主張するように改変したことを指摘した。三柳の主張が羅山や尺五と同様の朱熹の発言をもとにしてなされており、この三者はいずれも「気の生生の原理」を捨象し、死後も自身を構成していた気が残存することを志向していたことから、かかる主張が朱子学で説かれる死生観を受容する一つの典型的なパターンであることを述べた。

## 第5章 十七世紀中葉における仏教批判一向井元升を中心に

本章では、前章で検討した中山三柳と交流のあった向井元升（慶長14年・1609～延宝5年・1677）を検討することによって、17世紀中葉における仏教批判の様相を明らかにすることを目的とした。先行研究においては、元升が明暦元年（1655）に執筆した『知耻篇』という書物に分析が偏向していることを指摘し、寛文四年（1664）に書かれた『孝経辞伝』という書をも考察の対象として、元升の思想形成を跡づけることの必要性を指摘した。

まず『知耻篇』にみられる元升の仏教批判を分析し、彼が仏教の後生説への批判・克服を自己の思想的課題としていることを述べた。そして元升の批判が、儒教の現世における有効性を武器になされているのではなく、人間の生と死はいかなるものであるのかということを示明して仏教の死生観の誤謬を暴露するというものであること、しかし、そこで示された死生観はいまだ仏教の後生説に対抗するうえでは弱点を有していたことを指摘した。さらに、確固たる人間の生と死の論理を示明するという意識のもとで『孝経辞伝』が執筆されたことを述べた。

次に元升の『孝経辞伝』を分析した。元升は朱熹の執筆した『孝経刊誤』を批判しつつ注釈したことをふまえ、朱熹の『孝経』解釈と比較しながら検討した。元升の『孝経』解釈の特色として以下の2点を指摘した。

1点めは、天地開闢から連綿と受け継がれてきた「本性」を自国の生活様式に従って保持し、子孫に伝えていくということである。この主張は、人間の「本性」が国ごとに異なる様相を帯びるということの意味し、日本においては「神の子孫という属性」として顕現する。また自己の「本性」が死後子孫のなかに永続するという点において、死後の「本性」の行方を明確化し、『知耻篇』執筆以来の元升の思想的課題であった仏教の後生説に対抗する死生観を提示したということを示明した。

2点めは、死後の安心を得るために、自己の「本性」を保持・伝授することは、人々が自力でないうることではなく、為政者の教化によって成就されるという「教化」を重視する解釈をしたことである。この解釈は、個々人のもつ力を国家に忠孝をつくすよう誘導するものであった。人々は自国の生活様式に沿って、国家に忠孝を尽くし続けることで「本性」を覚醒させ、死後子孫のなかに永続する存在となるのである。朱熹は普遍的原理に基づき、民一人一人が自らの力で「孝」を実践していくことを意図し、そのためには不都合である『孝経』の箇所を疑問を発生し、削除するまでに至った。その箇所を元升は国ごとに異なる様相を帯びる「本性」の連続・不滅を読み込み、個々人の主体性を制約し、為政者による教化を前面に押し出した解釈をしたことを指摘した。

最後に元升が長崎において当時新しく流入してきた黄檗宗とそこに盲目的に群がる人々を目の当たりにしたことを契機として思想を形成していったことを指摘した。

## 終章

本論文において明らかにしたことを、以下のようにまとめた。

1点めは、儒者の仏教批判が寛永17年（1640）頃を境に変化するということである。儒者の仏教批判は寛永17年頃までは、儒教をの現世における有効性を武器に仏教の死生観を批判していた。そこでは、人間の生と死を仏教とは異なる論理をもって批判することはなかった。これは慶長・元和年間における林羅山、中江藤樹、『清水物語』に共通してみられる主張である。かかる仏教批判は、寛永17年頃を境に、朱子学を受容しつつ死生観を明示して仏教の死生観を批判するように変化していく。寛永末年以降の林羅山、中山三柳、向井元升の主張がこれに相当する。先行研究において仏教の死生観への批判は江戸期の儒者に共通してみられる現象であるとされていたことに對し、寛永17年頃を境に儒者の意識が変化していくことを述べた。

2点めは、儒者が提示した死生観は、朱熹の主張に忠実であろうとしつつも、その核心―「気の生生の原理」―を捨象し、死後も自己を構成していた気が天地に残存するというもの、また「神の子孫」という本性が子孫へと連綿と受け継がれていくというものであったということをも明らかにした。つまり、朱子学にみられる仏教的死生観への批判とは異なる論理をもって、仏教批判を展開していたということである。これまで、江戸期の儒仏論争は中国のその受け売りであり独創性に乏しいとされてきた。しかし、一見朱子学の理論と相違ないようにみえても、その内実は朱子学と異なることを明らかにした。

3点めは、寛永17年頃を境に仏教批判が変化する背景の1つが、島原の乱を契機とするキリシタン問題であったということである。キリシタン問題をきっかけとして、儒者は自己の教説の拡大を図るために、人間の生死、とくに死について思索するようになったことを指摘した。

最後に展望として、17世紀中葉において、死生観も含めて人々の意識がそれ以前とは大きく変容していく可能性を指摘した。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、序章と、本論にあたる第一章から第五章、および終章の全七章からなる。

序章では、江戸時代における儒者の仏教批判に関する先行研究を整理した上で、その問題点と本論文の課題を明らかにし、さらに研究の方法と視点について述べる。

まず、従来の研究において、江戸期の儒仏論争は荻生徂徠の登場する18世紀初頭がその転換期と捉えられてきたこと、また日本の儒仏論争は中国のそれを踏襲したものが多く、儒教・仏教が相互に本質的な思想的影響を与えあうことはなかったとされてきたこと、を指摘する。それに対し筆者は、17世紀半ばに、儒者が朱子学の「気の生々の原理」をもとに仏教の死生観を批判するようになる事実に着目した上、仏教批判の論理の変化と構造を分析することによって、朱子学の日本の変容の実態を解明できるのではないかという見通しを述べる。それはひいては、江戸期の儒仏論争が中国の二番煎じに過ぎないとする、従来の通説の克服にもつながる、とする。さらに、そうした仏教批判の論理の変容の背景を明らかにしていくことが、本論文の課題であると述べる。

第一章「中江藤樹の仏教批判と『考経』」では、序章の問題提訴を踏まえて、中江藤樹の仏教批判を死生観に焦点をあわせて検討する。

藤樹の仏教批判が、明末に編纂された『考経大全』に収録された虞淳熙の『考経』解釈に依拠するものであること、ただし藤樹は虞淳熙の死生観にかかわる部分だけは引用しなかったこと、その理由とし

て、藤樹は人間の死に関心を向けることなく、その仏教批判でも死の問題は棚上げされてたこと、を論ずる。従来の研究になかった新しい指摘である。

死について語らなかつた藤樹に対し、その弟子の熊沢蕃山などになると、人間の死が儒教の言説を用いて明確に語られるようになり、死生観について仏教と儒教の差異化が図られることを指摘し、そのことをもって17世紀中葉における儒者の仏教批判が変化したとする。

第二章「林羅山と仏教批判と死生観」では、林羅山の半世紀にわたる仏教批判について、その変化に着目した研究はほとんどなかつたことを指摘し、批判の論理の変遷を具体的に解明することが本章の課題であるとする。

羅山の初期の仏教批判が、儒教を〈人倫の教説〉として捉え、その現世での有効性を強調して仏教の輪廻再生説を批判するものだったのに対し、後期には儒教を人間の生死を解き明かした〈生死の教説〉とみる立場から、仏教的死生観を批判するようになったと述べ、17世紀半ばに至って羅山の仏教批判が決定的に変化したとする。また、羅山が朱子学を受容するにあたって、それを独自に改変したことを指摘する。

第三章「朱子学の死生観の登場——松永尺五の思想をめぐって」は、松永尺五の『彝倫抄』をとりあげ、朱子学の死生観が注目されるようになる背景とその受容の実態を解明しようとしたものである。

尺五が朱子学の死生観に着目するのは、キリスト教に対抗して民衆教化を行う必要性を痛感したためであったこと、尺五の死生観は朱子のそれを忠実に引用しているようにみえながらも、その教説の核心である「気の生々の原理」を捨象し、死後の靈魂の常住を主張するものであったこと、を論ずる。また尺五は仏教を容認しながらも、それを現世の人倫を説くものと捉え、生死の問題についてはそれをどこまでも儒学の理論によって説明しようとした、とする。

第四章「仮名草子における仏教批判の変容」は、『清水物語』『飛鳥川』を中心に、仮名草子にみられる仏教批判と死生観を検討している。

まず『清水物語』（1638刊行）では、儒教側はもっぱら自説の現世における有効性を武器に仏教の死生観を批判し、人間の死の問題について儒教固有の理論を示そうとはしなかつたことが指摘され、そうした仏教批判の論理は中江藤樹や初期の林羅山のそれと共通するものとされる。それに対し、『飛鳥川』（1652刊行）になると、朱子学の理論を受容して独自の死生観を形成し、それにもとづいて仏教批判がなされるようになると述べ、仮名草子の世界においても17世紀中葉に至って仏教批判に変化が生じたとする。また、仮名草子でも朱子学受容にあたって「気の生々の原理」が捨象され、死後の靈魂の永続性が主張されるようになることを指摘する。仮名草子の思想を取り上げた研究はこれまでほとんどなく、今後の発展が期待されるテーマである。

第五章「十七世紀中葉における仏教批判——向井元升を中心に」は、向井元升の二つの著作『知耻篇』『考経辞伝』を取り上げ、元升の思想形成を跡付けようとしたものである。

『知耻篇』では元升が仏教の後生説の批判・克服を自己の思想的課題としていたこと、しかしその死生観は仏教に対抗するためには弱点を有していたこと、それを克服するために『考経辞伝』が書かれることになった、とする。さらに朱子の考経解釈と比較しつつ『考経辞伝』の思想を分析することによって、そこには朱子はみられなかつた、「神の子孫としての属性」といった要素や、為政者の「教化」の重視といった要素が浮上して来ることを指摘する。

終章では、本論における考察の要旨をまとめるとともに、今後の研究の課題について述べる。

本論文は、江戸時代前期における儒者の仏教批判を取り上げ、儒者たちに仏教批判の思想的素材を提供した朱子学の日本の変容という問題とも関連づけつつ、その特色と歴史的意義を明らかにしようとし

たものである。

江戸時代の儒仏論争は中国のその二番煎じにとどまり、十分な知的成果を生み出さなかったという従来の通説に対し、本論文は日中両国の多様な史料を駆使して、17世紀中葉における仏教批判の論理の変化を、仏教排撃の思想的素材を提供した朱子学の日本の変容という問題と絡めつつ、丹念に描き出している。その上で、朱子学を独自の形に変容せしめての仏教批判の出現は、新たな死生観の構築という、この時期儒者たちが直面した思想的課題に答えようとする試みであったことを指摘する。個々の論証や史料解釈にいくつかの課題は残すものの、独自の問題意識と丹念な考証に基づき多くの新知見を提示している。本論文が斯学の発展に寄与するところ大いなるものであることは疑いない。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。